高宮八幡宮社報（季刊誌）　令和元年六月　福岡市南区高宮四―九―三四

やまもも　第八十五号　高宮八幡宮

〒八一五～〇〇八三　TEL五二二～八四三五　http://www.takamiyahachimangu.com/

祈りなば
必ず神に
通うもの
祈りて動かぬ
ものはなきなれ

◇ 御世代わり・大祓（夏祭） ◇

今年の大祓は平成のケガレを一掃する大祓です、祭祀の厳修に勤めたいと思います。

常にもご奉仕頂く世話人や月次祭をはじめ定例のお祭りにご参集頂く氏子さん達は、祭典中の張り詰めた空気感や祭典後に続く清々しさと開放感を感じつつ、神気（御稜威）に触れ祓いを受けていきます。神気を受け祓われることを意識できないまでも、心素直に何となく好ましく感じられるものです。ご奉仕する神主や世話人が神通自在と言える程に神に通じることが出来たならば、氏子地区に住める氏子の皆さんがその時を境にすべての罪ケガレが祓われたらと思います。

日々の日供祭と月毎の月次祭で氏子崇敬者に何事も無いようにお祈りしておりますが、残念ながら世にある不幸災難は絶えません。

それで、ご縁のあった方にはご本人お一人からご家族、親族友人知人と御稜威の輪が広がって欲しいものです。境内に訪れて清々しく思われるように、ご自分の神棚から住まい全体を神域のようにして頂ければと思います。そのようになれば隣近所は本より町内全体が明るく晴れ晴れとした雰囲気になっていきます。令和の大祓を期に浄化の輪が広まらんことをお祈りいたします。

大祓　半年間のケガレ（病気や不幸の原因）を祓い、命の増長を御祈念いたします。

獅子祭　子供達の健やかな成長と、地域の発展と安全を祈ります。

六月二十九日（土）　十四時半

◇ 渡辺博士の神道講座 ◇

文学博士　渡辺勝義

「近代の肖像―危機を拓く」〈本田親徳〉　後編

本田親徳が確立した鎮魂法と帰神術の神法の実際について、弟子の長澤雄楯は、「親しく其行う所を見るに神霊を人に憑依せしむること自在のみならず、亦克く無形神懸の自感に熟したると審神者として疑わしき憑霊を訊問するの精密にして厳粛なる毫も遺漏なく、邪霊を責罰するに霊縛するの速なる等、他人の追及する能わざる者なりし」（『惟神』）と述べている。

神懸りが権威を失った近世の神道はもはや形骸化した神道であり、それは神道ではなくて人間道である――と厳しく非難したのは、戦後の困難な時期に神道界の論客として斯界をリードした葦津珍彦であった。

氏は神道のエッセンスともいうべき神懸りの法、つまり神霊と直接交流する術を知らず、従ってなんら神霊との感合もなく「神意」を全く受け得ない、賀茂真淵や本居宣長らの国学神道者たちについて、「なぜかれらは、『天地の動きは神の知るところであるから神に聴くべきだ。正しき道は、神々の命に忠であるべきだから、神の意は、神から聴くべきだ』と答へなかったのであらうか」と厳しく問うた。

それは彼らが「世俗合理主義者に近づいてしまっていたから」であるとして、「神懸りによる神の啓示が受けられない近世の神道はすでに亡んでいる」と葦津は論じている。神道は行ずるものであり、その神髄は理による解釈のみでは到底分かり得ないのである。

明治維新は、初めはすばらしいスタートだったのに一体どうして歪んでしまったのか。「御維新」と言われる如く、実は「明治維新」の中心は神道復興運動であり、「日本の本質」へ回帰しようとする動きであった。にもかかわらず、結果的には西欧の模倣に傾いて、文明開化主義へと走ってしまった。日本人としての気高い誇りや至誠の心を失い、自分を見失い、それまで蔑んで来た筈の世間的な「欲望」の虜になり、「吾れ良し」人間になり下がってしまったのである。

本田親徳が「霊学は浄心を以て本と為す」（『道之大原』）と教えるように、神道行法を身を以て実践し、真にその奥の堂に入るためには、世俗の名

利や欲望など一切に囚われない徹底した「浄心」の持主でなければならない。神は不浄を嫌い、清浄心こそ神の嘉し賜う心であるからである。

神霊に直接する術もその経験すらない者たちにとっては、特に「無私の精神」をなくして私的欲望や野心を抱いている者たちにとっては、「神の御心を伺う」のは大変恐ろしいことである。なんとなれば、自分のご都合主義には決して神がなびかないということを知っているからである。「神からの啓示が自分自身を全否定されるかもしれない」という恐れや不安が常にあり、故に自己保存のためには神を必死で遠ざけようとするのである。

「神霊に直接し、神教を賜る」という古代以来の神道の根本的要素が失われてしまっているという状況が、現代日本のさまざまな危機を生み出している元凶であるとも言えよう。わが国の真の姿を知り、未来を拓くためには、まず神典国学を学び、建国以来のこの国の有り様を深く理解する必要がある。日本精神文化の根底には「神道」という汲めども尽きぬ真清水が滾々と湧出しているが、その本質は密接不離な「神と人との関係性」にこそ存するのであり、今日見るようなすっかり観光化した神道や形骸化してしまった神道などには無くなっているのである。

ヒューマニズムや理性主義、民主主義などの空疎な言葉に近代社会は人々の幸福と平和とを期待して来たが、今日、歴史が如実に物語るように、不安と猜疑と焦燥感の肥大のみが露わになって来ている。

人類が抜本的な世界観の転換を迫られているこの時、真に自然に根差した心身のあり方が問い直されなければならない。今こそ日本神道の本質を真摯に問い直すべき時が来たのである。この状況に真っ向から対峙できる力を持っているのは、神霊と直接し、真に神教（神の啓示）を受けることのできる本来の意味での「真の神道」なのであり、神霊との交流にその生涯を懸けて実践した本田親徳のように、世俗の一切の名利にとらわれない、行一筋に生きる「学と行」とを兼ね備えた誠実の人、真の霊学者の出現こそが待ち望まれるのである。

◇　見直し聞き直し　日本を取り戻す

◎　マッカーサーの謝罪　全文

日本の皆さん、先の大戦はアメリカが悪かったのです。日本は何も悪くありません。日本は自衛

戦争をしたのです。イギリスのチャーチルに頼まれて、対ドイツ参戦の口実として、日本を対米戦争に追い込んだのです。

アメリカは日本を対米戦争に誘い込むためにイジメにイジメぬきました。そして最後通牒としてハルノートを突きつけました。中国大陸から出て行けだの、石油を輸入させないなど、アメリカに何の権利があったというのでしょう。

当時、アジアのほとんどの国が白人の植民地でした。白人はよくて日本人は許さなかったのです。ハルノートのことは私もアメリカの一般国民も知りませんでした。あんなものを突きつけられたら、どんな小さな国でも戦争に立ち上がるでしょう。戦争になれば、圧倒的な武力でアメリカが勝つことは戦う前からわかっていました。

われわれは戦後、日本が二度と白人支配の脅威にならないよう周到な計画を立てました。アメリカは知っていたのです。国を弱体化する一番の方法はその国から自信と誇りを奪い、歴史をねつ造することだと。戦後、アメリカはそれを忠実に実行していきました。

まず、日本の指導者は間違った軍国主義をとってアジアを侵略していったと、嘘の宣伝工作をしました。日本がアジアを白人の植民地から解放するという本当の理由を隠すため大東亜戦争という名称を禁止し、代わりに太平洋戦争という名称を使わせました。東京裁判はお芝居だったのです。アメリカが作った憲法を押しつけ、戦争が出来ない国にしました。

公職追放をして、まともな日本人を追い払い、代わりに反日的な左翼分子を大学など要職にばらまきました。その教え子たちが今、マスコミ、政界などで反日活動をしているのです。徹底的に検閲を行い、アメリカに都合の悪い情報は日本国民に知らせないようにしました。ラジオ・テレビを使って、戦前の日本は悪い国だった、戦争に負けてよかったのだと、日本国民をだましました。これらの政策が功を奏し今に至るまで、独立国として自立できない状態が続いているのです。

私は反省しています。自虐史観を持つべきは日本ではなくアメリカなのです。戦争終結に不必要な原子爆弾を二つも使って何十万人という日本人を虐殺しました。最後に私が生きていた時の証言を記して謝罪の言葉としたいと思います。

『私は日本について誤解していました。日本の戦

争目的は侵略ではなく、自衛のためだったのです。太平洋において米国が過去百年間に犯した最大の過ちは共産主義を中国において強大にさせたことでした。

東京裁判は誤りだったのです。日本は八千万人に近い膨大な人口を抱え、その半分が農業人口で、あとの半分が工業生産に従事していました。潜在的に日本の擁する労働力は量的にも質的にも、私がこれまで接したいずれにも劣らぬ優秀なものです。

歴史上のどの時点においてか、日本の労働力は人間が怠けている時よりも、働き生産している時の方がしあわせなのだということ、つまり労働の尊厳と呼んでよいようなものを発見していたのです。これまで巨大な労働力を持っているということは、彼等には何か働くための材料が必要だということを意味します。彼らは工場を建設し、労働力を有していました。しかし彼等には手を加えるべき材料を得ることが出来ませんでした。

日本原産の動植物は、蚕をのぞいてほとんどないも同然でした。綿がない、羊毛がない、石油の産出がない。錫がない、ゴムがない、ほかにもないものばかりでした。そのすべてがアジアの海域に存在したのです。もしこれらの原料の供給を断ち切られたら、一千万から一千二百万人の失業者が日本に発生するであろうことを彼等は恐れたのです。従って日本が戦争に飛び込んでいった動機は大部分が安全保障の必要に迫られてのことだったのです。』

アメリカ上院軍事外交合同委員会の公聴会にて
1951年5月3日　ダグラス・マッカーサー

鎮守の杜から　六十一

○　神と人　その関係

価値の変容　異常な政教分離

戦後の日本では占領政策の中で言論を統制し教育を管理して歴史認識を操作しました。その影響が未だに続き日本文化が変わってしまうような異常な政教分離がなされています。それで信仰や宗教に対して社会の中で触れずに、そしてやや排除的に捉える傾向があるようです。そのため伝統的な習俗や行事なども行政や教育とは関わりが薄く、社会学、宗教学的な研究や理解も海外に比べて大雑把でなおざりになっています。

政教分離という言葉のもと信仰や伝統的な行事

や風習などを、行政や教育の場から排除することが戦後長い間行われて来ました。日本人は何時しか無宗教的な思いの中で暮らすようになっています。そのため都会では個人や社会の安定を謀る、安全装置としての信仰や風習や儀礼が機能しなくなっています。それは人の営みの内にある信仰的な風習や儀礼は、人の生き方や社会の有り様と表裏一体に関わり合っているからです。

（◎　慰霊や葬儀は霊魂の存在や死後世界との関わりを想定して行われています。つまり霊魂や死後世界を想定しない無宗教、宗教的社会的な儀礼無しでは出来ないと言うことです。◎　政教分離とは特定の宗教団体（教会）を優遇や排除しないように配慮することでです。政教分離に厳正なアメリカでは大統領の就任は教会でミサを受け聖書に手を置き宣誓します。）

日本人の信仰や風習、儀礼などが消滅や変容することによって私たちの価値観、世界観が変わって行きます。人生をどのように生きていくのか、社会とどう対応するのか、死生観、生きている意味合いまでが変わります。それで個人一人一人も世の中も、長い年月かけて築き上げてきた日本人が先祖から受け継ぎ大切にしてきた価値を見失ってしまいました。

古来日本では神と人とは親子関係とされています。そして神仏習合の長い時を経て神様と佛様とご先祖様は見えないけれども常に人の側に居られ、人を見守っておられるとされてきました。日本人の温厚な人柄や盗みや殺人などの犯罪の少なさ。戦争の無い平安な世の中を作り、人々が自然と共存して過ごしてきた日本人の歴史は、神仏先祖と共に生きて居るという世界観の中で育まれたものです。それが随分と揺らぎたした感があり、引き返し出来なくなる前に私たちは日本に合った生き方を模索し取り戻さなくてはなりません。

「天に唾する」「死んで先祖に合わせる顔が無い」など正しくまっすぐな生き方を良しとし、それにそぐわない時「恥をかく」としてきました。自分の都合だけを優先し他を顧みない生き方を「吾良し」として戒めていました。

日本人の勤勉さ真面目さは神と共に働くという労働観から来ているとされています。神々は高天原でも労働されています。一方聖書では労働はアダムとイブが蛇にそそのかされて、リンゴの実を食べたその罰として労働の苦しみと出産の苦しみを与えられとされています。日本人の勤勉さは神の御心にかなうことであり、業種事にお守り頂く神々が居られ共に働き知恵を授けたり常にもお守り頂くものと信じています。日本人の生活の中で

はあらゆる所に神々や先祖が居られ自分たちの行いを見守っていると思って暮らして来ました。

いつの間にか個人主義そして利己主義が主流となってお人好しの日本人は居なくなってきています。穏やかで勤勉なお人好しの日本人に戻りたいと思います。

人は神の分け御魂を戴く存在

古道霊學（古代から継承される教え）では産土の神より直日御霊を戴き、親先祖より四魂を戴いて人として生まれてきます。この世に生まれてくるのは神の子である人の霊魂を向上させる機会を戴いているとされています。そして神の経綸に添ってこの世をより良くすることが、この世に生まれ出た魂の使命とされています。

人は万物の霊長とも言われますが、霊長とはタマシイのオサと読め、直日霊は動植物の中で人にしか授からないものです。人は神の手代わりとしてこの世に授けられたとされ、そのことわりを命＝ミコト持ちと言っています。それゆえ神に命をつけお呼びし、人にも尊称として使います。

私たちの戴くこの上なく尊い産霊神の分御魂（直日霊）は神そのものであり、直日霊は私たちの顕在意識の働きでは捉えることが出来ません。日常考えたり思い込む顕在意識の働きが止まると直日霊が働きます。それで古来より無心になることがあらゆる宗教体験の場で重要視されています。

日本の武道を始め芸道では禅の影響からか無心と言うことが良く言われます。それは直日霊の働きが最も良く進んでいる日本人の霊性の高さ故のことと思います。その霊性の輝きを日常生活の中に落とし込んでいるところに、日本人と日本文化のすごさがあると感じています。

日本国を和の国とするのは、日本神道では世界中の人々が人種や国籍宗教に関係なく神より直日霊を授かって、神々の前では人は平等であるとします。その当然の帰結なのです。

それゆえに、日本文化に憧れや注目が集まっているのでしょうが、同時に誤解や理解しがたいところも多分にあります。私たち日本人が日本文化やその心の有り様を深く掘り下げ自覚しつつ伝えていくことが必要になります。言語化される以前の意識を言語化せずそのまま伝えたり共有する能力を押し広げ、さらに言語化を進め、あらゆる手段を講じてそれなりに伝えることが出来るようにならなければと思います。

禅では「不立文字」と言って悟りや禅の本質は言葉に出来ないと断った上で、禅問答をはじめ見解や偈や絵画などあらゆる手立てを使って伝えようとします。

直日霊は日本人や日本文化、神道などと言った限定的な枠組みで無く、人が戴く直日霊は人の本質であり世界（宇宙）の本質（神そのもの）と理解されることがらです。直日霊に私たち人が触れ、命の大元に還元することによって、この世界がより良くなっていくと考えられています。

これは天の岩戸開きのモチーフでもあり、私たちが自分自身の神聖に気付きそこに回帰することによって自己の尊厳を得ると同時に世界が変わることを示唆しております。また大己貴大神が自己の幸御魂奇御魂出会うのも、人の魂が持つ本来の姿を現しその向かうべき可能性を伝えております。

三大神勅や古事記等に顕される世界の本質を表象する事柄は、天孫たるご皇室だけに限ったことでは無く、日本人はもちろんのこと人類すべてに対するものであります。ハッキリ申せばその霊性の高さによって開示される世界ですから、日本国に必然と顕れご皇室に継承されたものと解しております。余り多くのことを知っている訳ではありませんが、諸外国の宗教や信仰には霊性の高さを感じられるものはさほどありません。

◇　開運家庭百日行　満行者　（四～五月）

第四十回満行　冨田末子　殿

第三八回満行　久野貴子　殿
第三七回満行　安河内由美子　殿
第三五回満行　原口豊子　殿
第三十回満行　宮﨑祐暢・純子　殿
第二九回満行　小山田昌弘　殿
第二三回満行　久野智教・睦子　殿
第二十回満行　右田カズミ　殿
第十三回満行　山本香代子　殿
第十日満行　篠原素子　殿
第六回満行　川村佳子　殿
石田チカ　殿
伊藤洋子　殿
吉澤久美子　殿
森実真寿美　殿
第五回満行　川村冨子　殿
第四回満行　北古賀理圭　殿
第二回満行　柴田真紀子　殿
第一回満行

六月の行事

月次祭　朔日・十五日　十時
神道講座　朔日（土）　十一時

大祓・獅子祭　二十九日（土）　十四時

※　ここ数年開催日が猛暑日（野外活動要注意）でしたので、今年は新暦にて行います。

七月の行事

月次祭　朔日・十五日　十時
神道講座　六日（土）　十四時

八月の行事

月次祭　朔日・十五日　十時
神道講座　夏休み